

奥積雅彦（総務省統計研究研修所教官）

ニューカレドニア日本人移民団の初代総監督 小野 弥一は統計院OB

（本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.24」を基に作成）

MENU

- 1 東京統計協会のメンバーとしての小野弥一の主な功績
- 2 明治期に我が国で初めて留学して統計学を受講したのは小野弥一？！
- 3 統計学において Probability（プロバビリティー）の訳字を最初に考案したのは小野弥一？！
- 4 統計の日に…

小野 弥一 おの やいち
(1847-1893)



弘化4年（1847年）生まれ。昌平坂学問所（昌平黌）を経て、横浜仏語伝習所でフランス語を学ぶ。開成所教授ののち徳川家に仕え、明治4年（1871年）、アメリカ、ドイツ経由でスイス・ジュネーブに到着し、普仏戦争が鎮まるのを待って、フランスに留学。元中央統計局長ルゴア氏の家に寓し、同氏について統計学、行政学、経済学を学び、その後モーリス・ブロック氏に学ぶ。また、フランス駐在の中野公使代理を通じて、フランスの司法省、農商務省、大蔵省の各統計部局において、実務を執り、様式の調整、事実の蒐集方法等を攻究。帰朝後は、明治10年、調査局（政表課誌の8月17日に調査局御用掛となる旨の記事があり、政表（統計）の業務を担当し

たとみられる）を経て、明治14年、統計院（現在の総務省統計局に相当）、会計検査院に勤務。その後、工部省、文部省（帝国大学書記官）、会計検査院検査官補を経て、明治25年、ニューカレドニア初代日本人移民団総監督を囑託される（会計検査院の非職検査官補の身分で日本吉佐移民会社へ加盟し社員業務に従事）。明治26年、現地で死去。東京統計協会会員、役員としても活躍。

【参考資料】統計集誌第154号に所収の鴨里陳人「故小野彌一君の履歴」¹、統計学雑誌第303号に所収の岡松徑「明治九年以降十年間漫録」²、小野健次「ニューカレドニア初代日本人移民団総監督の足跡」（琉球大学学術リポジトリ）³、政表課誌⁴、官報⁵、国立公文書館デジタルアーカイブ⁶、【写真】：小野健次氏所蔵

1 東京統計協会のメンバーとしての小野弥一の主な功績

1 人口調査の草案を作成⁷

明治17年（1884年）4月の東京統計協会⁸の定期総会の日、小野弥一は「人口調査ノ必要ナル理由」について演説し、彼の発議により人口調査の実施方法を調査することとなり、調査委員として、小野弥一、依田昌吉、高橋二郎、武市利美、辻啓一郎、呉文聰、相原重政の7名が人口調査の参考資料の収集、草案の起草を担当しました。草案及び参考資料については明治19年3月に東京統計協会会長渡辺洪基名義で内閣統計局長石橋重朝あてに提出されました。これを受けて政府が直ちにアクションを起こすことはありませんでしたが、東京統計協会は、その後も累次にわたり政府や衆議院、貴族院に国勢調査の建議・陳情などの国勢調査実現のための促進運動などの働きかけを行いました。こうした活動も奏功し、大正9年（1920年）に第1回国勢調査が実現しました。小野弥一の発議による人口調査の草案は、国勢調査の創始に向けた要請行動の先駆けとなるものと考えられます。

¹ 国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1573021/21>

² 国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1487845/16>

³ <http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/bitstream/20.500.12000/36857/1/No11p163.pdf>

⁴ 政表課誌：明治4年から明治14年の統計院設置に至るまでの太政官政表部門（政表課等）の史実

⁵ 国立国会図書館デジタルコレクション

・明治24年12月15日付け官報 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2945802/4>（非職の件）

・明治26年11月10日付け官報 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2946375/2>（依願免本官の件）

⁶ 国立公文書館デジタルアーカイブ

・明治24年12月14日付け文書 会計検査院・検査官補小野彌一非職被命ノ件

・明治24年12月22日付け文書 非職検査官補小野彌一日本吉佐移民会社へ加盟社員業務ニ従事ノ件

・明治26年11月08日付け文書 非職検査官補小野彌一依願本官被免ノ件

⁷ 人口調査の草案（統計集誌第55号）：国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572923/15>

⁸ 東京統計協会：統計図書館ミニトピックスNo.14「明治期に創刊された民間統計団体の機関誌は？」脚注2参照

2 フィッセルリング「統計ノ限界」の翻訳

東京統計協会の機関誌である統計集誌第57号・第59号（【参考資料】参照）に所収の小野弥一訳「統計ノ限界」（第7回万国統計公会でフィッセルリングが起草提出したものを翻訳したもの）については、宮川公男「統計学の日本史」（2017年刊行）第5章の「明治統計学の学問論争」の冒頭で引用されており、彼の訳文が統計学の学問論争を理解するうえで重要な位置づけにあることをうかがい知ることができます。

3 統計集誌への横書きの文とアラビア数字の表式の導入

前掲の岡松徑「明治九年以降十年間漫録」によれば、統計集誌が一時、横書きの文とアラビア数字の表式とし、これを提案したのは小野弥一である旨が紹介されており、縦書き主流の時代において、彼の先見の明を感じます。このことは、統計集誌第67号（【参考資料1】参照）における彼の執筆記事「統計集誌體面改正ノ必要」からもうかがい知ることができます。

4 国勢調査前史における小野弥一の功績

島村史郎「日本統計史群像」（杉亨二と門下生）によれば、太政官（政表部門、統計院）時代の杉亨二の門下生には、外国語に堪能な者が多くいたとされ、そのなかにフランス語に堪能な小野弥一の名前が挙げられていました。筆者が、たまたま、日本帝国統計摘要について調べる過程で、小野弥一の名前が登場し、前掲の「ニューカレドニア初代日本人移民団総監督の足跡」に出会い、彼はニューカレドニアのニッケル鉱山で働く日本人移民約600名を率いた初代総監督であったことがわかり、さらに調べると、彼は、徳川宗家給費生に選抜され、フランスに留学し、統計学や統計実務などを学び、また、帰朝後、統計院に勤務するなど、統計の黎明期である明治初期から中期に、欧州の統計学の導入に貢献した一人であることがわかりました。

今回の調べものからも、国勢調査の創設に向けて多くの人の努力があったからこそ、大正9年（1920年）に第1回国勢調査を実施することができたのだと再認識し、国勢調査前史における小野弥一の功績を後世に伝えたいと思います。

2 明治期に我が国で初めて留学して統計学を受講したのは小野弥一？！

我が国で留学して初めて統計学を受講したのは、文久2年（1862年）から慶応元年（1865年）までオランダに留学（ライデン大学でフィッセルリング教授の指導を受ける）した津田真道と西周ですが、彼らは西洋学問の全体像把握の一環として統計学を学びました。その後、明治期における統計関係者や統計学者の履歴を調べた限りでは、明治4年（1871年）に小野弥一が留学のためアメリカ等を經由してフランスに赴き、元中央統計局長ルゴァー氏の家に寓し、同氏について統計学等を学び、その後モーリス・ブロック氏に学びました。明治6年にドイツ語通訳としてウィーンに派遣された相原重政がオーストラリア商業大学校で、統計学を学んだことがわかりました。そして、新渡戸稲造がドイツに留学して統計学を学んだのは、明治20年であり、その後、柳沢保恵が明治27年に留学のためヨーロッパに赴き、ドイツ、オーストリア、ベルギーの大学で統計学などを学び、次いで、高野岩三郎が明治32年から留学のためドイツに赴き、ミュンヘン大学で経済学と統計学を学び、その後、藤本幸太郎が明治43年から3年間ドイツ、イギリスに留学し、統計学を学び、財部静治が明治44年から、統計学研究のため、ドイツ、イギリス、アメリカに留学したことがわかりました。

また、富田仁編「海を越えた日本人名事典 新訂増補」（16世紀から明治中期までの欧米諸国へ渡航した日本人2,100人を収録した人名事典）を調べたところ、明治期に小野弥一よりも先に、留学して統計学を学んだ者は見当たりませんでした。

以上のことから、明治期に我が国で初めて留学して統計学を受講したのは、小野弥一である可能性が考えられます（現時点における筆者の個人的見解です）。⁹

9 【参考資料】

- ・相原重政：島村史郎「日本統計史群像」（杉亨二と門下生）
- ・新渡戸稲造：新渡戸記念館HP
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ「故伯爵柳沢保恵叙勲ノ件」
- ・大島清「高野岩三郎伝」
- ・藤本幸太郎「統計学と私：留学時代とその前後」（一橋大学機関リポジトリ）
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ「故京都帝国大学教授財部静治勲章加授ノ件」

3 統計学において Probability（プロバビリティー）の訳字を最初に考案したのは小野弥一？！

中塚利直は、その論文「プロバビリティーの訳語の歴史」において「明治の初期に統計学の本はいくつか発行されているが、現代的あるいは数学的な意味でのPの翻訳の第一号の榮譽を授けるべきは、明治13（1880）年の小野弥一「統計學要初編」であろう。」とし、同書の23頁（【別記】参照）を引用し、「プロバビリティー」を「近眞法」と訳していることを紹介しています。同論文では「貨幣を何度も投げ、表が出る割合を調べる実験は我々も時々するが、これを最初に広めたのがケトレーであり、明治の本にはケトレーの実験として紹介されている。つまりケトレーは統計でデータを集めるのは、大量に集めて真実を掴むためと考え、その根拠を、当時のP理論の発展に拠った。小野はP理論は大数の理論そのものと考えたのであろう。そこで真に近くなるという意味で「近眞法」と訳した。彼はその後もケトレーをより詳しく紹介し、そこで「近眞理論」や「近眞法」を使っているが、彼自身がPの数学理論を展開することはなかった。小野はP理論の最初の翻訳をなしただけでなく、初めて数学的な意味でのPに接した日本人ではないかと予想される・・・」としています。

【注】当該論文では「プロバビリティー」を単に「P」と略称しています。

筆者は統計 TodayNo.136 「なぜ「Statistics」は「統計」なのか？—「統計」の訳字が定着するまでの経緯と森嶋外」において、「Statistics」の訳字が「統計」に定着するまで紆余曲折があったことを紹介したところ。今回の調べもので、統計学において「Probability（プロバビリティー）」の訳字が「確率」に定着するまでの経緯についても、紆余曲折があり、そして、その経緯の中で、統計学において「Probability（プロバビリティー）」の訳字「近眞」を最初に考案したのは小野弥一であるとみられることを知り、温故知新を実感しました。

【別記】

小野弥一「統計學要初編」（第2章 萬国統計公会の起源）（抜粋）

…ケトレー氏に在りては近眞法（プロバビリティー）の計算を修むるの學者にて兼て人体長短の平均を研究するの理論者なれば、殊に計數に着眼せり。抑（そもそも）事物の數は愈（いよいよ）増すに従ひ得る所の結果愈眞に近し。是（こ）れ則（すなわち）大數法なり。…

（筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、ルビ等を付しました。）

4 統計の日に…

小野弥一がニューカレドニア日本人移民団の初代総監督として、精神的、肉体的に著しい労苦の多い環境において業務に精励をしたことは、小林忠雄の著書「小野弥一伝」（仏蘭西学研究 14 号所収）及び同「ニュー・カレドニア島の日本人 契約移民の歴史」からも読み取ることができません。後者の文献から、外務省大臣官房移民課長名義で監督官の更迭を始めとする措置を求める文書が存在していることも分かり、衝撃的でした。当時の外務省大臣官房移民課長は、原敬（外務省通商局長兼取調局長）が兼務していたことについても、原敬と国勢調査についてのトピックスを調べていた筆者にとって衝撃的でした。ちなみに、原敬日記（福村出版）第1巻で当該文書の日付け前後の記事で関連のありそうなものは見つけることができませんでした。

そして、小野弥一は明治26年（1893年）10月18日にニューカレドニアで病氣により不帰の人となりました。¹⁰

奇しくも、小野弥一の命日は、のちに統計の日（10月18日）（昭和48年（1973年）7月3日閣議了解により制定）となりました。

筆者は、統計院OBである小野弥一の功績や労苦を知り、国の未来の礎を築くこととは何かについて改めて考える機会を与えていただくことができました。

¹⁰【補足】「非職検査官補小野彌一依願本官被免ノ件」（国立公文書館デジタルアーカイブ）をみると、免官発令が明治26年1893年11月8日付けでなされており（同月10日付の官報にその旨掲載）、発令決裁に添付の辞表は明治26年10月30日付けとなっています。死亡診断書（統計図書館ミニトピックス【No.24】参照）における本人の死亡日（明治26年10月18日）との関係でどう解するか…疑問です。辞表の日付は、後任の赴任時期を見込んだのでは…と予想するも、これを裏付ける資料は見当たりませんでした。

【参考資料】「統計集誌」（東京統計協会）にみる小野弥一氏の執筆記事の例

	タイトル	備考 (記載の URL は、国立国会図書館デジタルコレクション (※国立国会図書館/図書館送信参加館限定) で閲覧可能)
統計集誌第 20 号 明治 16 年 ¹⁸⁸³ 年 4 月刊行	歐洲各國中央統計會	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572888/3
統計集誌第 21 号 明治 16 年 5 月刊行	歐洲各國中央統計會	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572889/3
統計集誌第 37 号 明治 17 年 9 月刊行	人民論	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572905/3
統計集誌第 57 号 明治 19 年 5 月刊行	統計ノ限界 【注】第 7 回万国統計公会でフ ィッセリングが起草提出したも のを翻訳	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572925/6
統計集誌第 59 号 明治 19 年 7 月刊行	統計ノ限界(第五十七號 ノ續キ)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572926/2
統計集誌第 63 号 明治 19 年 11 月刊行	佛蘭西銀行役員貯蓄會社 【注】パリ統計協会雑誌より訳 出	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572929/4
同	雜記 一千八百八十三年 商船ノ景況 【注】パリ協会雑誌に掲載の海 上保険雑誌より抜粋した記事を 訳出	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572929/8
統計集誌第 66 号 明治 20 年 2 月刊行	統計協會將來ノ事業	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572932/2
統計集誌第 67 号 明治 20 年 3 月刊行	統計集誌體面改正ノ必要	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572933/3 【参考】本号から明治 20 年 12 月刊行の第 76 号まで左横書き 文とアラビア数字の表式に、表紙・目次は欧文併記に
統計集誌第 68 号 明治 20 年 4 月刊行	統計普及策考案	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572934/3
統計集誌第 70 号 明治 20 年 6 月刊行	学理ノ用ニ応スヘキ統計 書式編纂法一名統計活用 論	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572937/3
統計集誌第 71 号 明治 20 年 7 月刊行	萬國統計學士會院(千八 百八十七年四月九日佛國 經濟新報抜訳)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572938/8 【参考】統計集誌第 72 号・第 73 号に類似のテーマの記事があるが、本文・目次に「小野彌一」又は「Y.Ono」 のクレジットなし ・統計集誌第 72 号 「萬國統計學士會院(羅馬府通信)」 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572939/12 ・統計集誌第 73 号 「萬國統計學士會院(前号ノ続)」 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572940/13
統計集誌第 73 号 明治 20 年 9 月刊行	萬國統計學士會院設置ノ 趣旨并本年伊國羅馬府ニ 於テ第一次會開設ノ概況 (去ル八月二日東京統計 協會月次會ニ於テ演説)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572940/3
統計集誌第 75 号 明治 20 年 11 月刊行	地方統計委員ヲ置ノ必要	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572942/3
同	地方統計編纂ノ趣旨	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572942/3
同	佛國通路統計(六十九號 ノ續キ)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572942/8 【参考】統計集誌第 69 号に「通路統計」の記事はあるが本 文・目次に「小野彌一」又は「Y.Ono」のクレジットなし ・統計集誌第 69 号 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572935/12
統計集誌第 90 号 明治 22 年 2 月刊行	官府ノ統計ヲ論ス(第一)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572956/2
統計集誌第 91 号 明治 22 年 3 月刊行	官府ノ統計ヲ論ス(第二)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1572957/4